

【研究室彙報】

2015 年度 担当学科

一学部

渡邊 洋子（本学大学院教育学研究科 准教授）

同和・人権教育論(前期) 相関教育システム論基礎演習ⅡA(前期)

生涯教育学概論Ⅱ(後期) 相関教育システム論基礎演習ⅡB(後期)

生涯教育学専門ゼミナールⅠ(前期) 生涯教育学専門ゼミナールⅠ(後期)

出相 泰裕（大阪教育大学教職教育研究センター 准教授）

社会教育計画論Ⅰ(前期) 社会教育計画論Ⅱ(後期)

一大学院

渡邊洋子（本学大学院教育学研究科 准教授）

生涯教育学演習Ⅰ(前期) 生涯教育学演習Ⅱ(後期)

生涯教育学研究Ⅰ(前期) 生涯教育学研究Ⅱ(後期)

岩槻 知也（京都女子大学発達教育学部 教授）

生涯教育学講読演習(前期)

末本 誠（神戸大学発達科学部 名誉教授）

生涯教育学特論Ⅱ（後期）

1. 授業報告

生涯教育学演習Ⅰ・Ⅱ

報告者：臼杵健太郎

Advanced Seminar on Lifelong EducationⅠ・Ⅱ

USUKI, Kentaro

2015年度の生涯教育演習Ⅰ・Ⅱは、火曜日隔週の4限、5限に開講された。担当教員は渡邊洋子准教授である。授業の目標は、年間を通じて「生涯教育学における主要な理論的・実践的課題と論点について、参加者全員が協同で探究することを通して、生涯教育学研究において求められる総合的な力量形成をはかろうとする」（「生涯教育学演習Ⅰ」「生涯教育学演習Ⅱ」概要、2015年度シラバスより抜粋）ことである。

本授業は、院生を対象としているが、学部生、他講座の学生、研究生、その他生涯教育学に関心をもつ人々が参加しており、多様な角度からの意見の交換が行われた。さまざまな異なった問題意識をもつ人々が意見を出すことで、自らの関心や意識だけでは習得することのできない生涯教育の視点を得ることができた。

本年度は、生涯教育学講座の院生の修士論文、博士論文発表はなかったため、自らの問題意識の掘り下げが中心に行われた。前期、後期での発表で、修士論文、博士論文へ向けての

動機づけが強固なものへと変わった。来年度は、今年度から学習したことを基に、論文作成を本格的に進めていく。

生涯教育学講読演習
報告者：ジョン ハンモ

Reading in Lifelong Education
JEONG, Hanmo

生涯教育学講読演習は、「当該分野に関する英語の読解能力を高めるのはもちろんのこと、成人の生活と学習やリテラシーの関係についての理解を深めるとともに、エスノグラフィックな調査の方法論についても学習を進める」（「生涯教育学講読演習」概要、2015 年度シラバスより抜粋）ことを目的とするものである。担当教員は、京都女子大学発達教育学部の岩槻知也教授であり、火曜日 2 限に開講された。

テキストとして用いられたのは、David Barton, Roz Ivanic, Yvon Appleby, Rachel Hodge and Karin Tusting 共著の *Literacy, Lives and Learning* (Routledge, 2007) であった。本授業は、同テキストを、各受講者が、毎週一章ずつ要約及び発表し、その後受講者全員がその章についてコメントし、ディスカッションする形で行われた。本書は、英国ランカスター大学リテラシー研究センターが実施した大規模な質的調査プロジェクトの結果に基づいて、成人の生活と学習の関係を検討したものである。とりわけ、岩槻教授は、2010 年 4 月から 1 年間同センターで客員研究員として在職したため、同書に記されている研究についてより深く実際的な話を聞くことができた点は非常に興味深かった。

最後に、同授業において最も印象的だったのは、移民者の「Skills for Life」を如何にして育むかに関する内容であった。本来「Skills for Life」とは、成人が基本的な生活を営むために必要とされる能力を意味する。しかし、近年英国において移民者が急増にしたが故に、同概念は言語を含めた「英国での生き方」まで意味を拡張した。このことは、人口減少により、今後多くの移民者を受け入れねばならない日本や韓国においても多くの示唆を与えてくれると思われる。こうした時代の変化につれ、「いつでも、どこでも、だれでも」できる学習を支援する生涯学習の役割は、さらに強調されるであろう。今後の研究においては、こうしたことまで視野に入れながら進めていきたいと考えたのである。

生涯教育学特論Ⅱ
報告者：池田法子

Advanced Studies of Lifelong Education II
IKEDA, Noriko

2015 年度の生涯教育学特論Ⅱは、神戸大学発達科学部名誉教授の末本誠教授を招き、大学院科目として後期の火曜 2 限に開講された。本授業では、生涯教育学研究において、ライ

フストーリーやライフヒストリーといった伝記的手法を用いる方法論について検討した。受講者は生涯教育学講座の院生・学部生、研究生、他講座の院生を含む 6 名で、末本教授の研究室 OG でナラティブの手法をキャリアカウンセリングに応用している稲本恵子氏にも議論に参加していただいた。

本授業では、末本教授が明石市あかねヶ丘での実践の成果をまとめた「語り合う自分史」という資料を導入として、2010 年から神戸大学で開催されてきた日仏ライフヒストリー研究国際シンポジウムの資料(全 6 回)を読み、ライフヒストリー研究の理論的系譜・基盤、具体的な活用方法や実践例について学んだ。受講者が実際に自らの人生を物語るワークショップでは、ナラティブの方法論の難しさと面白さが体感された。さらに、フランス・トゥール大学の名誉教授であるガストン・ピノー氏が成人教育にライフストーリーを応用する可能性を示した著作『人生の創造』の翻訳の一部や、末本教授の『沖縄のシマ社会への社会教育のアプローチ——暮らしと学び空間のナラティブ——』(福村書店、2013)をテキストとして用い、方法論の応用について議論を深めた。

最後に、後期の授業全体を通して各自がそれぞれ深めたい課題として、語ることが人に力を与えることの有用性/危険性について、歴史研究での応用方法、語り手と研究者の当事者性などが共有された。本授業で学んだナラティブの方法論の基礎的知識を活かし、今後は自らの研究に合わせて応用・発展の可能性を探っていきたい。

生涯教育学専門ゼミナール I・II

報告者：臼杵健太郎

Seminar on Lifelong Education I・II

USUKI, Kentaro

2015 年度の生涯教育学専門ゼミナール I・II は、水曜日 4 限に開講された。担当教員は渡邊洋子准教授である。前期では、生涯教育学における基本的知識や研究方法論、議論の進め方を学び、学部生は卒業論文執筆に向けて研究の問いを立てる作業を行った。後期では、生涯教育学における発展的知識や方法論を、個別の研究テーマと関わらせ、具体的な研究作業へと繋げることを目標とした。

本授業は主に 3、4 回生を対象としているが、院生や研究生も参加している。前期、後期を通して、さまざまな視点から生涯教育的な研究を考察することで、卒業論文に留まることのない研究に対する姿勢や方法論を身につけることができた。

また後期では、映画を題材に生涯教育的な論点を見つけ、議論する機会があった。文献だけではなくアプローチにより、日常の中で問題意識を常にもつ姿勢を養うことができた授業であった。

社会教育計画論 I・II

報告者：奥村旅人

Planning of Out-of-School Education for Youth and Adult I・II

OKUMURA, Takahito

2015 年度の社会教育計画論 I・II は、大阪教育大学教職教育研究センターの出相泰裕准教授を招き、金曜日の 4 限に開講された。授業の目的は、「国・自治体が社会教育計画をたて、そして施策や事業等を評価していくうえで前提となる、社会教育・生涯学習に関する基本的事項を確認する」ことである。(2015 年度京都大学シラバス「社会教育計画論 I」「社会教育計画論 II」より)

前期は社会教育の歴史や役割、政策動向について、社会教育計画とは何かということについて、大学と社会教育の関係について、などのテーマを、講義や文献の講読などによって学習した。

後期は前期に学習した知識を前提として、受講者が特定の自治体について社会教育の観点から報告を行った。取り上げられたのは大阪府柏原市、大東市、富山県小矢部市、京都市京都市、兵庫県西宮市であり、「①生涯学習推進計画・社会教育計画、②生涯学習推進体制、③実際の事業、及び④教育委員会の事務評価」(前出シラバスより)についてそれぞれ報告が行われた後、それらの現状や課題などについて議論がなされた。

本講義を通して得た社会教育行政の評価の視点を自らの関心にひきつけ、今後の研究に活かしていきたいと考える。

2. 2015 年度卒業論文 要約一覧

スポーツ選手の育成とキャリアをめぐる現状と課題

—野球選手を中心に—

沖元 俊樹

はじめにの内容は次のとおりである。

本稿は、現在のスポーツ選手育成において、引退後のキャリア問題(セカンドキャリア問題)が問題視されているのはなぜかという問いについて、野球選手を事例に取り上げて考察するものである。合わせて、日本とは異なる制度をもつ米国の取り組みから示唆を得て、日本でのセカンドキャリア問題解決への方向性と道筋を検討する。ここでいうセカンドキャリア問題とは、スポーツ選手が引退後のキャリア形成に関して直面する諸問題のことである。

1 章の内容は次のとおりである。

日本におけるスポーツの特質の一つとして挙げられるのが、「求道性」とも言えるものである。これは何らかの道(分野)への真剣な取り組みを通して真理や悟りを求めるというよ

うな考え方である。筆者はこの「求道性」こそ現代日本のスポーツのあり方や選手育成を方向づけ、大きな影響を与えているものとする。

2 章の内容は次のとおりである。

野球選手はその現役期間中に様々な人生の分岐点(トランジション)に直面するが、そのいずれでも引退後のキャリアを考えることがなく、引退後のキャリアにおいて重要な社会に出るにあたっての心の準備の形成、働くことの積極的理解と覚悟、自分なりの「仕事観」の形成、自分の人生を切り開いていくことへの自己効力感の形成がなされていない。

3 章の内容は次のとおりである。

アメリカにおけるスポーツ選手養成は、スポーツの実力以外の面を養成しようとする点、スポーツに専心させようとする日本とは対照的である。NCAA(全米大学体育協会)と各大学体育局が中心となって、学力向上やキャリア開発、競技力向上などを目的としたプログラムを学生に提供している。

4 章の内容は次のとおりである。

第 1 章から第 3 章で見てきたことから、野球選手におけるセカンドキャリア問題の発生を防ぎ、野球を志す青少年のキャリアの可能性を広げていくにはどうすればよいのか検討した。部活動として野球を行う際には学業成績も重視した取り組みが必要であること、現役中に次のキャリアについてしっかりと考察することが重要であることを示した。

宿泊施設における交流と学び ーゲストハウスの場づくりに注目してー

白井 皓大

近年日本では、「ゲストハウス」と呼ばれる宿泊施設への関心が高まっている。ゲストハウスの特徴としてよく言われるのは、「様々なバックグラウンドを持った人々との交流」である。しかしながら、ゲストハウスに関する研究は緒に付いたばかりである。そこで本論では、「ゲストハウスにおける交流の実態」を明らかにすると共に、「なぜゲストハウスは交流が盛んであるのか？」について、ゲストハウスの「場づくり」という視点から明らかにしていく。

第 1 章ではまず、ゲストハウスに関する既往研究についてまとめると共に、既往研究におけるゲストハウスの定義の問題点について述べ、本論におけるゲストハウスの定義を定める。そして、ゲストハウスの分布・経営形態・設備等の特徴について述べる。

次に第 2 章では、ゲストハウスの実地調査やインタビュー調査を基に、ゲストハウスにおける交流を、宿泊者同士、宿泊者とオーナー・スタッフ、地域住民の関わりに分けて考察する。

それを踏まえて第 3 章では、そのような交流と学びを成り立たせるものとして、「場づくり」をゲストハウス開業までと、開業後に分けて考察する。開業までの場づくりにはオーナーが大きく関わっている。開業の動機にはオーナーのライフヒストリーが影響しており、フリーアコモデーションという住み込み制度のため流派を形成している。また旅館業法や建築基準法によってゲストハウスの設計に制限が加えられており、小規模経営が多い理由も

示唆された。開業後の場づくりでは実際に宿泊者と関わるオーナーやスタッフの影響が大きい。宿泊者に声をかけるなど積極的に関係を作ると共に、宿泊者同士の交流を促進するため紹介したり、イベントを開催したりなどしている。また、予約時にゲストハウス利用上の注意事項を伝えるなど、ゲストハウスの雰囲気を理解してもらうための工夫も見られる。また宿泊者にも交流志向がみられる。以上のことが組み合わさって、ゲストハウスの場が出来ていることを明らかにしている。

最後に第4章では、レイ・オルデンバーグの提起した「サードプレイス」という概念を手がかりに、「場」としてのゲストハウスの機能及び効果を考察する。サードプレイスは、その地域に根ざした場所であることが念頭に置かれているが、ゲストハウスでの交流は非日常の場かつ短期間の関わりしか無いにもかかわらず、サードプレイス的な機能が多く生じていることは特筆に値する。また、サードプレイスでみられる恩恵とされるものについても、ゲストハウスでも同様にみられることが分かった。

特撮ヒーロー番組の世代的受容と変化 —仮面ライダーシリーズを事例として—

馬淵拓真

本論文は、近年子ども向けとされつつも大人をもその対象に含むようになった特撮ヒーロー番組にみられる変化を、仮面ライダーシリーズを事例として整理・分析し、その変化が人々にどのような意義を持ったものであるのかを考察するものである。

第1章では、特撮ヒーロー番組や仮面ライダーシリーズがどのような特徴を持ち、いかに子ども向けのものと位置づけられてきたのかについて述べた。仮面ライダーシリーズは、他の特撮ヒーロー番組よりも大きな市場を持ち、作品ごとの変化も大きいため、本稿における分析対象に適していた。そして、仮面ライダーシリーズは社会において子ども向けのものとして存在し、子どもに対する大きな影響力を持ったものとして認識されていた。

第2章では、仮面ライダーシリーズにおける実態的な変化とそれに伴う対象世代の拡大を述べた。仮面ライダーシリーズでは、近年その内容が大人の鑑賞に堪えるような複雑なものになっており、実際に視聴者層の世代的拡大が指摘されていた。また、関連商品が非常に多彩になり、大人向けの商品も多く販売されるようになった。

第3章では、第2章で述べた変化の要因を、仮面ライダーシリーズにおいて重要な視聴者・消費者に注目し、社会的背景をもとに考察した。まず、大人が子どもの頃の文化的嗜好をいつまでも持ち続けるようになり、大人になっても仮面ライダーシリーズを楽しむ受け皿ができたことが考えられた。大人側だけでなく子ども側でも、消費文化の発達に伴い、子どもが消費者として成熟したことも一つの要因として考えられた。また、少子化による子どもの減少も変化の要因の一つとして考えられた。

第4章では、以上のことをふまえて、仮面ライダーシリーズにおける変化が人々にとってどのような意義を持つものであったのかを考察した。まず、実際のファンの声を参考にしつつ、仮面ライダーシリーズが大人も楽しめるものになったことで、人々がいつまでも自分

の世代や好みに合わせて楽しむことができる、多世代向けの作品になったということを述べた。次に、仮面ライダーシリーズが親子が一緒になって楽しめるものになったということを述べた。このことは、実際の研究結果をもとに、親子間コミュニケーションや子どもの発達によりよい影響を与える可能性があるものだと考えられた。

仮面ライダーシリーズは、人々の文化的嗜好や消費形態の多様化に対応する形で変化し、子どもだけでなく大人でも楽しむことができるものとなったことで、「子ども向け」という枠を超えた。そして多くの世代に受け入れられるものとなり、人々が大人になっても楽しみ、また親子がともに楽しむことができるようになったと結論付けた。